

〈新資料〉岸上大作旧蔵の寺山修司第一歌集『空には本』の書き入れについて

葉名尻 竜一

はじめに

拙論「岸上大作の寺山修司 I・II」¹⁾で、岸上大作の代表歌「意志表示せまり声なきこえを背にただ掌の中にマツチ擦るのみ」(一九六〇)²⁾を、寺山修司の代表歌「マツチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや」(一九五七)³⁾と比較し、その影響関係について考察した。ここでは岸上大作と同時代の歌人・今西幹一の指摘を受け、詩句「マツチ擦る」の歌の系譜を石川啄木へと遡りながらも、歴史的文脈を背景にして岸上大作短歌の「マツチ擦る」の所作を時代の物語として立ち上げた。だが、岸上大作の歌は一九六〇年の時代状況にあるからこそ、作歌において、短歌上の〈私〉と作者との間合いが寺山修司の歌に比べて柔軟性に欠ける。それを〈遊戯性〉に探ったが、

この〈遊戯性〉は岸上大作が「寺山修司論」(一九六〇)⁵⁾その他のエッセイで展開した寺山修司批判のなかでも見落とした点であると論じた。寺山修司は岸上大作の印象を次のように述べている。

いつも私に突っかかり、批判しながら、しかし自己劇化はできて、それを効果的に伝達し、表現にまで昂めてゆく技術も思想も持たず、和歌は生硬で下手くそで、定型との持続的な葛藤もせぬままに死んでしまった男。その死はどこか、文学的早漏を思わせる。何が革命か、何が恋か。
(略) 私は、リングの中央にダウンしている鼻血まみれのみにくい敗者への一瞥のような眼できみの全歌をよみかえしている。実際のところ——いい歌などただの一首もないではないか。⁶⁾

一九六〇年十二月五日に二十一歳で岸上大作が自死し、それから十年後に『岸上大作全集』が編まれ、その付録「岸上大作考」への依頼原稿での回想である。寺山の記述に裏返しの愛情表現をみる意見もあるように、ここには甘えに逃げがちな若者を突き放し、叱咤激励するニュアンスが感じられよう。その上で「いつも私に突っかかり、批判しながら、しかし自己劇化はできて、それを効果的に伝達し、表現にまで昂めてゆく技術も思想も持たず」といった寺山の指摘は、自身の創作姿勢を顧みれば共通点になる「自己劇化」の作法について、岸上との明確な差異を鋭く批評した作家論でもあった。

以上を踏まえながら、この論考では岸上大作が実際に手にした寺山修司の第一歌集『空には本』(的場書房、一九五八・六)の書き入れについて、一つの見解を示すことにする。二〇一九年一月、岸上大作旧蔵の寺山修司歌集『空には本』を運よく古書目録のなかに見つけることができた。まずは、その旧蔵の歌集の奥付に記されたメモから確認することしよう。

第一章 第一歌集『空には本』の奥付への書き入れ

図1の左頁には「住所 豊島区高田南町2の483(石川方)」が傍線で消され、青色の万年筆で「文京区諏訪町43 みゆき荘内」と加筆されている。

一九五五年三月、十九歳の寺山修司は腎臓病のネフローゼで立川の川野病院に入院している⁷⁾。そのとき、母親は立川基地に住み込みで働いていた。退院後、寺山修司は高田馬場駅近くの「豊島区高田南町2の483

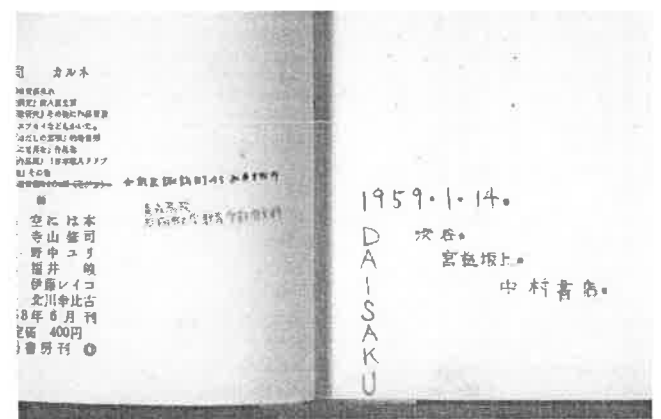


図1

〔石川方〕に下宿する。この場所を選んだのは入学した早稲田大学へ通うことを考えてのことだろう。それ以前は、母の従弟にあたる坂本豊治の家に寄宿していた。坂本家は埼玉県川口幸町の一軒家に暮らしおり、寺山は二階の部屋を借りていた。

同年の六月、今度は東京都新宿区にある社会保険中央病院に入院する。ここでの入院生活は三年余りも続くことになった。一九五八年七月に退院した二十二歳の寺山修司は、青森市に一時帰省するものの再び上京し、「文京区諏訪町43 みゆき荘内」に住む。六畳一間のアパートだったようだ。岸上大作が歌集『空には本』を手に入れたとき、寺山修司は「文京区諏訪町」の住所に転居していた。その住所を記した下のところに、黒色のペンで「青森高校／早稲田大学教育学部国文科」と寺山の出身校が書き添えられている。

右頁には、緑色のペンで横書きに「1959・1・14・／渋谷・／宮益坂上・／中村書店・」と書かれ、年月日の下にアルファベットの縦書きで「DAISAKU」と署名されている。

岸上大作の日記を書籍化した『もうひとつの意思表示』岸上大作日記 大学時代その死まで⁽¹⁾の、一九五九年一月十四日(水)に次の記述が見つかる。

田島邦彦は次のように語る。

いまも不思議にぼくの想像力を刺激してやまない歌集『空には本』は、寺山の最初の単独歌集で、短歌作品としては初期のものに重きが置かれるなかで大方の評価を得ている。

〈森駈けてきてほてりたるわが頬をうずめむとするに紫陽花くらし〉を冒頭におき、一九五八年六月に刊行された。ぼくが田舎の高校で受験勉強に拍車がかかっていた時期だ。その頃、街の書店で見た『短歌年鑑』一九五八年版の自選作品集で寺山修司の存在を知ったが、一晩で今まで親しんできた近・現代短歌と訣別しなければならなかったほど、激しい憧憬と憎悪と嫉妬ともなった衝撃に震えた思い出がある。(略)

安保の年、寺山にこだわっていた学生歌人岸上大作がいた。彼は、「寺山修司論」を残してその年の暮自殺した。じつは大きな声では言いたくないが、ぼくが所有しているものは、岸上が一九五九年一月渋谷宮益坂上の中村書店で定価四百円の半額で手に入れたものを、岸上が死の直前に、今から憶えば形見のつもりで僕に手渡してくれたものだ。岸上は「寺山修司論」のなかで、当時ぼくが書いた寺山の歌に多出する〈われ〉に関する批判を

- 一時限受講、四時限受講。
- 渋谷宮益坂上中村書店二テ。「空には本」(寺山修司)四百円を二百円でも買う。

緑色のペンで書き入れられた日付と場所と書店名とが一致するので、この『空には本』は岸上大作旧蔵の歌集であることが確認できる。

第二章 岸上大作と田島邦彦

歌人で、岸上大作とともに同人誌『具象』を創刊した田島邦彦の回想記を参照しておこう。

「われ」の回収」と題された文章は、古書をめぐる情報誌『彷彿月刊』⁽²⁾に載っている。一九八七年五月号の特集は「寺山修司がいた」である。寺山修司が亡くなったのが一九八三年五月四日であるから、没後四年の特集となる。

執筆人は田島邦彦の他に、中井英夫、北川幸比古、富士田元彦、寺山はつ、黒田推理、長部日出雄、秋元潔、渡辺英綱、宇野亜喜良、萩原朔美、かわなかのぶひろ、東陽一、木村威夫、芥正彦、福島泰樹、晋樹隆彦、八木忠栄、道浦母都子、内堀弘である。

正しいものとして補足引用している。

(傍線―筆者)

「岸上が一九五九年一月渋谷宮益坂上の中村書店で定価四百円の半額で手に入れたものを、岸上が死の直前に、今から憶えば形見のつもりで僕に手渡してくれたものだ」と田島邦彦は告白している。田島と岸上との関係性を別の資料で、もう少し詳しく見ておこう。

田島邦彦は「具象」の思い出⁽³⁾に次のように書き留める。

ところで岸上との実の交友は、同人誌「具象」を創刊(60・7)し、二号(60・10)を出し、三号へ向け動きはじめたごく短期間だった。岸上が三年生、私は一年下の中大法科の二年生だった。大学は違っても駆け出しの文学青年には、それなりに競争心も意欲もあった。(略)

私が上京した五九年、それまで合同歌集『青年』を刊行するなど活発に活動していた大学歌人会の新しい役員になった林安一、高瀬隆和、岸上大作らが短歌会をもつ各校に働きかけて、再び「大学歌人会」の勢力を盛り返すべく動きが活発化していた。その皮切りに、中大が世話役となつて、この日、大学連合歌会を中大会館を借りて開催した。集まったのは國學院大など八校から約二十

名で、そのあと引き続いて佐藤佐太郎氏を招き、中大ベ
ンクラブの歌誌「葦芽」の合評会も開いた。
これが起点となり、翌年の「具象」創刊へと歩を進め
ることになる。(略)

誌名も「具象」で一致し、二十二日の集まりでは、各
自の執筆担当がきまる。評論は岸上と私が書くことにな
る。私は岸上のように早くから社会主義に目覚めるとい
うことはなく、寺山修司に衝撃をうけたばかりで、作品
も習作の域を一步も出るものではなかった。

(傍線―筆者)

二人の出会い、田島邦彦が上京した一九五九年、大学
歌人会が再び勢力を盛り返した頃となる。その翌年に「具
象」を創刊する。「評論は岸上と私とが書くことになる」
とあるように、この第一号に田島邦彦の「現代短歌論」と
岸上大作の「ぼくらの戦争体験」が掲載される。先の回想
記で田島が「岸上は「寺山修司論」のなかで、当時ぼくが
書いた寺山の歌に多出する「われ」に関する批判を正しい
ものとして補足引用している」と述べた箇所で言及してい
る「当時ぼくが書いた寺山の歌」への評論が、この「現代
短歌論」である。その一節を引いておく。

散文に比較する時、詩歌も同等な表現能力の可能性の
限界にまで到達しようといったが、寺山修司をはじめと
する新世代の作品があまりに無残に現代的な無機能さを
晒しているというポイントを考察してゆこう。

最初にして最後である究極的な一点は、彼等自身に主
体的な感情・認識および意志が欠如しているのである。
それは寺山修司の歌にたひたひ見出すことのできる「わ
れ」という言葉に関係するところの独断的(マ)な空想・思考
の捻出力とは、どれほど緊密な意味あいの繋がりは持
っていないことを断つておく。

(傍線―筆者)

田島邦彦は、寺山の歌に多出する短歌上の「われ」と歌
人その人である寺山修司の「主体的な感情・認識および意
志」とが「どれほど緊密な意味あいの繋がりは持つてい
ない」と批判する。作歌における独自の「空想・思考の念
出力」が、「フィクションの機能のもとにどれだけ真実の
自我を生かしているかは疑問に思われる(嶋岡晨)」と分
析したものと捉えられようか。田島邦彦は、その要点を評
論のなかで「主体性の欠如」「自己の欠如」と表現している。
それにしても、田島邦彦も言うように、岸上との実の交
友は「具象」創刊から「三号」向け動きはじめてごく短期

間だった」のにも関わらず、なぜ、岸上大作は大切な寺山
修司の歌集『空には本』を田島邦彦に手渡したのだろう。
ここまで資料を概観してみると、寺山修司の歌集は田島
邦彦にこそ相応しい、と岸上大作が考えたと推量してもよ
いのではないか。おそらく、田島邦彦は岸上大作と会って
いるときにも寺山修司について熱く論評していたのだと思
う。田島はそれくらい、寺山修司登場の衝撃に震えたに違
いない。

次に、岸上大作旧蔵の寺山修司歌集『空には本』の書き
入れのなかで、もつとも注目すべき箇所を検討してみたい。

第三章 寺山修司の代表歌への書き入れ

歌集を通覧すると、いくつかの歌に○(マル)や✓
(チェック)が付されていることがわかる。そのなかにあつ
て、一三四頁に、寺山修司の代表歌に並ぶようにして歌が
二首、書き入れられているのが見つかる。言及しやすくす
るために、寺山修司の代表歌を含めて、それぞれの歌に番
号を振って翻刻しておく。まずは寺山の代表歌を①とし、
その右側にある歌から順に記す。

①、マッチするつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖

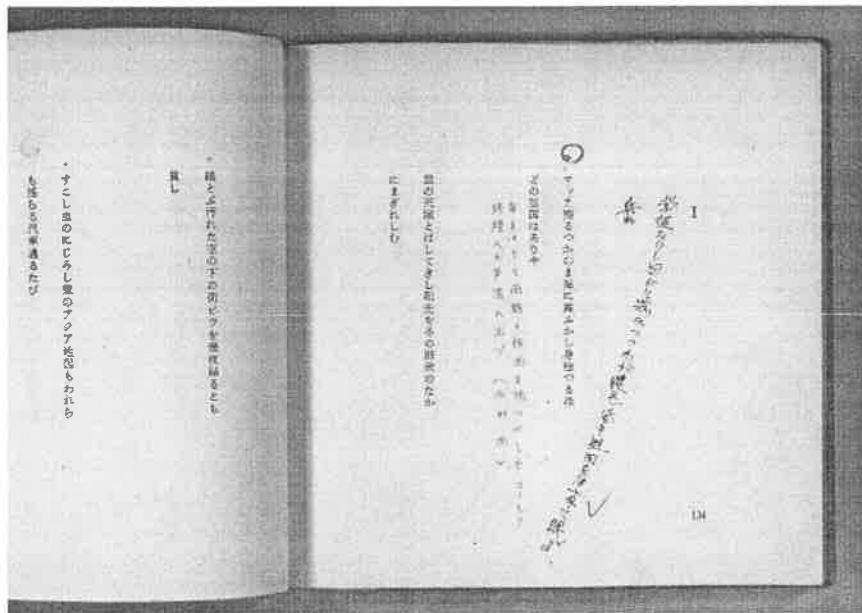


図2

② 国はありや
生徒たりし日より病みつつわが睫毛昏き祖国をはさ
みて眠る

乗舟（見せ消ち―筆者注）
③ 身をはりて雨期の祖国を拾つべしやコーモリ修繕人
の声溢れ出づ（西村尚）

並べればすぐに気づくことだが、三首は「祖国」という
単語で申刺しにされている。

③の歌はカッコ内に歌人名が書かれているから、この一
首から見えていくことにする。

西村尚は舞鶴市出身で、國學院大學の学生時代に岸上大
作と活動をともにしていた歌人である。のちに飛騨短歌
会を主宰しながら、白峯神宮や朝代神社で宮司をつとめ
た。岸上大作の死後、高瀬隆和と岸上大作作品集『意志
表示』出版のために奔走した学友でもある。『意志表示』
は一九六一年六月、白玉書房から刊行された。白玉書房
は、一九六二年七月に寺山修司の第二歌集『血と麦』を、
一九六五年八月に同じく寺山の第三歌集『田園に死す』を
刊行している。『意志表示』の編集委員としては、岩田正、
岡井隆、小野茂樹、篠弘、富士田元彦、武川忠一の六名が
名を連ねた。

バイトに勤しみつつ、名立たる編集委員たちの間で、実務
的な仕事に骨を折っている様が見えてこよう。

西村尚は第一歌集『少し近き風』を一九七〇年一月に出
版した。二〇一二年十二月の『瑞歯』²⁰までに計六冊の歌集
を刊行し、没後の二〇一九年九月には遺歌集『言の葉』が
青磁社から世に送り出されている。そこで、国立国会図書
館に向き所蔵されている歌集を繰ってみたのだが、残念
ながら③の一首を見つけないことができなかった。岸上大作
が寺山歌集『空には本』を入手したのが一九五九年一月
十四日で、自死する一九六〇年十二月五日までのどこかで
田島邦彦に歌集を手渡したとして、所持していたその短い
期間に岸上が西村尚の歌を書き入れたと推察するならば、
この一首は一九七〇年の第一歌集刊行以前に西村尚が詠
んだ歌だと思われる。第一歌集『少し近き風』には収めな
かった歌なのかもしれないが、岸上大作の心には強く残っ
ていたであろう。歌の出自の調査は継続しなければなら
ない。²¹しかし、寺山修司の代表歌と並べたとき、二首の詩
語が描く像に響き合うものがあることは指摘できる。

西村尚の「身をはりて雨期の祖国を捨つべしや」が、寺
山修司の「身捨つるほどの祖国はありや」といった詩語の
選ばれ方に似ているだけでなく、比喩としての「雨期の祖
国」のなかにあつて修繕すべきかどうかと逡巡する短歌上

西村尚「本後の話『意志表示』について」²²を参照して
おこう。

その岸上の最初の出版物は、彼の自殺の翌年、昭和
36年（一九六二）の『意志表示』で版元の白玉書房の鎌
田敬止さんが「この種の本は売れませんと云いつつ、
自費出版が当然の歌壇でありながら、出版の自己資金を
持たない私たちを哀れんでは、恩に着せるでもなく出版
してくれたのだった。調布領町の鎌田さんの暗い家が忘
れられない。」

出版元については、実は「短歌新聞社」に依頼する予
定で、個人的にはすでに内諾を得ていた。しかし岡井氏
やその周辺からの声は「白玉の方がいいよ」というので、
急遽、鎌田さんを紹介してもらい、頼んだのだった。と
いう話はもう以前済んでいるか？（略）

『意志表示』出版の頃、私は大学院博士課程に在籍し
つつ、週のうち何日かは、都内から千葉市（西千葉下車）
の千葉経済高校へ通い、非常勤講師のアルバイトをやっ
ていた。

（傍線―筆者）

國學院大學の大学院生だった西村尚が非常勤講師のアル

の〈私〉の姿が、深い霧に閉ざされた海を前にして「マツ
チ」の火のように揺れる信念を「つかのま」顧みる寺山修
司短歌の〈私〉の姿に重なってこよう。ただし、西村尚の
歌は「捨つ」のが「身」ではなく「祖国」であると詠んで
いる。命を懸けるまでの「祖国」はないと黙想する寺山修
司の歌に対して、「雨期の祖国は」命懸けで捨てなければ
ならないとの声が聞こえる。

それでは、②の歌に移ろう。③の歌と比べてすぐに気づ
く点は、明らかに筆跡が違うことである。これはどうい
うことか。

第四章 書き入れたのは誰か

図3―ア、イは、寺山修司歌集『空には本』（図2）に
書き入れられた②の歌から切り取った文字である。図4―
ア、イの文字と比較すると、はらいや丸を書く時の運筆、
縦線と横線のバランスなどが似ており、ほぼ同じ人物によ
る筆跡ではないかと思われる。

図5は、姫路文学館に所蔵されている田島邦彦の直筆歌
稿である。図4―ア、イの文字は右側の歌「十二月の死者
とわが魂駆ける傷を負ひたるもの如くに」から切り取っ
た。

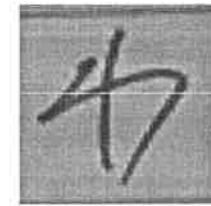


図4-1ア

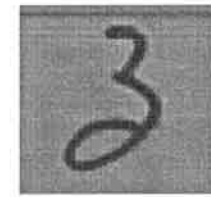


図4-1イ



図3-1ア



図3-1イ

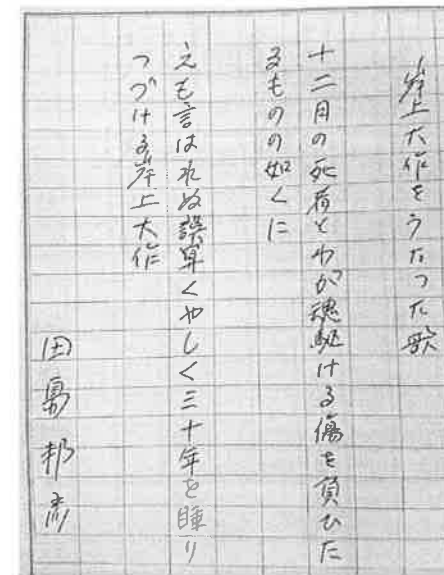


図5

ここから推察するに、②の歌を書き入れたのは田島邦彦ではないだろうか。岸上大作旧蔵の寺山修司歌集『空には本』が、岸上から田島邦彦に手渡され、その後、古書目録に並ぶまで他の人を経由していないとするならば、書き入れをしたのは田島邦彦であると判断してよいと思う。²³ただし、田島邦彦の書き入れたと仮定しても、今度は、それがいつの書き入れなのか不明である。岸上大作から手渡された時期かもしれないし、晩年になってから書き入れたのかもしれない。それでも、この勢いのある筆跡を見ると、寺山修司に傾倒していた若き日に歌集『空には本』を運よ

く手にし、その進む感受性で思わず書き付けてしまったと想像したくなる。また、②の一首が田島邦彦自身の歌なのか、誰かの歌を田島邦彦が書き入れたのかについても、現在、調査中である。²⁴ここで岸上大作の歌を一首、参照しておきたい。

④、学徒兵の苦悶訴う手記あれど父は祖国を信じて逝けり

高校生の岸上大作が詠んだ歌である。短歌結社誌『まひ

る野』一九五七年一月号に掲載された。²⁵この頃、岸上は日記に「今の十代は全く音なしだ。俺はこれを何とかしたいのだ。現在の十代が以前の寺山修司とはちがったものを持っていることを俺は、自分で知り得る。狭い範囲内の見識でわかる。俺は、この仲間を集めて、十代歌人の城が築きたい」（一九五七年一月二十七日）と書いている。

④の「学徒兵」は、②の「学徒」とその横に見せ消ちされた「兵た」とに、用語の発想が重なってこよう。また、寺山修司の代表歌は、一九五六年の『短歌研究』四月号が初出であるから、この時期に高校生だった岸上大作が詠んだ歌と比較すると、まるで連作のようにして響き合う。

④の歌に「父は祖国を信じて逝けり」とあるが、寺山の代表歌は「祖国」に対する世代間差を詠んでいると一般的には解釈される。寺山修司自身は戦争によって父を亡くした。一九五四年十一月、『短歌研究』第二回五十首応募作品の特選を受賞し、歌壇デビューを果たした寺山修司「チェホフ祭」の応募原稿の元々の表題は「父還せ」であった。それを当時の『短歌研究』編集長の中井英夫が改題したことは知られている。「父還せ」という叫びは、戦争で父を亡くした寺山修司世代の多くの子供たちの声である。²⁶そして、「祖国」を信じて身を捨てた父親の世代に対して、寺山修司の世代は「見捨てるほどの祖国はありや」と問うた

のだ。命を懸けてまで守るべき「祖国」はあるのだろうか、と。寺山の歌に詠まれた「祖国」への思いやイメージは暗い影をもっている。④の岸上大作の歌を経由させると、暗い影をよりいっそう具体的に描くことができるだろう。

改めて、田島邦彦が書き入れた②の歌に戻ろう。②の歌で詠まれた「昏き祖国」をイメージするならば、寺山修司の代表歌を受け継ぐようにして暗い影を抱えていると解釈できるだろう。ただし、ここでの「学徒」は、一九六〇年の日米安全保障条約改定に反対する闘争での学生を指しているのではないのか。なぜなら、横に並べて書かれた「兵た」が見せ消ちされているのだから。第二次世界大戦下を思い起こす「兵」という語は選ばれなかったのである。これが、歌集『空には本』に、歌を書き入れたことから発生する意味であろう。

では、「昏き祖国」を「わが睫毛」に「はさみて眠る」はどのように解釈すればよいのだろうか。

第五章 田中冬二の詩「幻の艦隊」

久松健一の評論が気になる。久松健一も寺山修司の代表歌を分析し、岸上大作の歌に言及しながら「マッチ擦る」所作の系譜を次のように辿っている。少々長くなるが指摘

箇所を引く。

寺山に噛みつき、やがてみずから命を絶った国学院大学の岸上大作でさえ、歌集『意志表示』の冒頭にこの一首に刺激をうけたことを隠さないこんな歌（岸上「意思表示」―筆者注）を置いている。（略）

ところで、この歌（寺山「マッチ擦る」―筆者注）を組上に載せたのは、織りなすイメージのふくらみについて云々したいからではない。数多の贅辞を浴び、秀逸と評されながら、この歌には明らかな下敷きがある。その点を問題にしたいのだ。田中冬二の詩「幻の艦隊」の最後の二行がそれである。

一本のマッチを擦れば

海峡は目睫の間に迫る（『晩春の日に』昭和三十六年）

さらには、富澤赤黄男のつぎのふたつの句。

一本のマッチをすれば湖は霧

めつむれば祖国は蒼き海の上（『天の狼』昭和十六年）

「マッチ（を）擦」「海（湖の読みも「うみ」である）」

返れば、俳句や短歌に留まらず映画にまで及んでいる。「マッチ擦るつかのまに」「カサブランカ」を読む寺山修司²⁸というしゃれたタイトルの論考もある。寺山は中学二年生のとき、母の叔父・坂本勇三が青森市に再建した映画館・歌舞伎座に居候していた。母と離れて暮らさなければならなかった孤独な少年の胸の内を映画フィルムが夢のリボンのようにして彩っていたのかもしれない。さらに映画だけでなく、寒い冬の夜空のもとでマッチの小さな火に心をあたためる夢を見たアンデルセンの童話『マッチ売りの少女』の影響がなかったとも言い切れないだろう。

影響関係を探る研究において、久松の評論で言及される堂本正樹の論考や、富澤赤黄男、西東三鬼といった名は早くから知られていた。しかし、田中冬二の詩は、久松健一に指摘されるまで取り上げられてこなかったのではないか。一九六一年十二月二十日、昭森社から詩集『晩春の日に』は刊行される。詩「幻の艦隊」の全文を確認しておく。

幻の艦隊

海峡を艦隊通過

星の美しい夜の海峡を艦隊通過

「霧」「祖国」という語がぴたりと重なる。さらには、西東三鬼の初の句集『旗』（昭和十五年）に載っている「夜の湖あゝ白い手に燐寸の火」も下敷きだと堂本正樹は指摘している（『現代詩手帖』一九八三年十一月）。（略）

ただし、田中の詩にも、富澤の句にも、西東のそれにも「つかの間」はない。「目睫の〈間〉」という言葉は見つかるが、「あいた」と「ま」は類語ではあっても同じではない。前者は差異を空間に広げるのに対して、後者はそれを時間の軸に沿って見つめる語であるからだ。寺山の出だしが時間的で、それが空間へと転じ、「祖国はありや」と訴えかける七音に収束するのに「つかの間」は大きな効果をあげている。また、「（霧）深し」も「見捨つる」も登場してこない。

（傍線―筆者）

斎藤茂吉の「あなあはれ寂しき人み浅草のくらき小路にマッチ擦りたり」（歌集『あらたま』一九二一年）にも言及し、詩句「マッチ擦る」の「共鳴はどうとらえるべきなのか」と久松健一は問う。久松は今西幹一が指摘した石川啄木の歌「マチ擦れば／二尺ばかりの明るさの／中をよぎれる白き蛾のあり」に触れていないが、寺山修司の「マッチ擦る」―一首における発想を探る近年の研究史を振り

黒鯛よ 河豚よ 烏賊よ
記憶してゐるか
かつての日の あゝの重厚なる艦隊の威容を

それはかなしくも幻の艦隊
蜃気楼のやうに消えた

一本のマッチを擦れば
海峡は目睫の間に迫る

田中冬二の詩「幻の艦隊」の初出は、一九五七年五月『現代詩入門』である。²⁹寺山修司の第一歌集『空には本』（的場書房）は、一九五八年六月の刊行であるが、その歌集に収録された代表歌「マッチ擦る」―一首の初出は、一九五六年の『短歌研究』四月号であるので、久松健一が問うように、寺山修司が田中冬二の詩「幻の艦隊」を創作の「下敷き」にしたとは、初出の年月日からみても考えられない。逆に、寺山修司の代表歌が田中冬二に影響を与えたと想像することもできようか。だが、「マッチ擦る」はそれほど独創的な詩句ではないだろう。もっと庶民の生活に近い日常語であり、マッチを擦って火を起こしていた時代の、その日常語をそれぞれのジャンルの作家たちが創作

のために自らの「空想・思考の捻出力」³⁾で鍛え上げた詩句だと考えた方がよい。

創作の影響関係についてはここまでにして、田中冬二の詩「幻の艦隊」の背景を理解することにしよう。参照するのは、和田利夫の『郷愁の詩人 田中冬二』⁴⁾(3)「艦たてまつれ」の一節である。

日本文学報告会の主催、大政翼賛会の後援で、詩部会発案による建艦献金運動としての「艦たてまつれ」詩の夕が開催されたのは、昭和十八年(一九四三)五月二十一日のことだった。会場は神田区一ツ橋の共立講堂。田中冬二は、はるばる諏訪から上京、これに出席している。

冬二が上京したのは、自作詩の朗読を会から要請されていたためだった。(略)では、日本文学報告会詩部会の最大のイベントともいえるべき「艦たてまつれ」は、どういう空気の中で進行していったのだろうか。戦局は昭和十八年に入ると、緒戦の華やかさは消え、ただならぬ様相を呈してきていた。(略)

今なら言える、ということでは言うならば、常識をはたらかせて考えてみると、制海権や制空権がアメリカの掌中に帰している状況下の建艦献金にどれほどの意味が

ゆらゆらと揺らめく幽霊船を頼りにして開催されていたのかは明白である。戦争協力としての詩の夕べに参列した国民が、今になって都合よくその共同幻想を忘れようとも、田中冬二は「黒鯛よ 河豚よ 烏賊よ/記憶してゐるか」と詰め寄る。「屋気楼のやうに消えた」「幻の艦隊」を、かつて称え祭り上げていたことを、と。

幻影に幻惑されてはならぬ、といった田中冬二の詩精神(ポエジー)が詩「幻の艦隊」に見事に表出される。

「一本のマッチを擦れば、海峡は目眩の間に迫る」とは、一息つくために擦ったマッチであろうと、その火に照らし出されるのは隠しておきたい遠い記憶であり、目を伏せようとも昨日のことのようにして迫りくる情景なのだ。

第六章 イメージの源泉

田中冬二の詩「幻の艦隊」を經由して、②の「学徒たりし日より病みつつわが睫毛昏き祖国をはさみて眠る」に戻ろう。田中冬二の詩に近接しているのは、寺山修司の代表歌「マッチ擦る」¹⁾一首ではなく、②の歌なのではないのか。

『眞象』創刊号に寄せた岸上大作の評論タイトルが「ぼくらの戦争体験」とあるように、一九六〇年の安保闘争を

あつたらうか。大将機の遭難は、暗号が解読されていたためだとは戦後判明した事実だが、前年(昭和一七年)六月のミッドウェー海戦を境に日本は劣勢に立ち、以来、押されっぱなしだったのである。たてまつられた軍艦を、どこの海に浮かべるつもりだったのだろうか。

今から思うと、「艦たてまつれ」は、詩人たちの共同幻想による一場の祭典でしかなかった。冬二は戦後になつて、こんな詩(「幻の艦隊」¹⁾筆者注)を書いている。(傍線筆者)

一九四三(昭和十八)年五月二十一日に、日本文学報告会の主催で、大政翼賛会の後援による詩部会発案の建艦献金運動として「艦たてまつれ」詩の夕が開催されている。戦時下における軍艦建設のための勸進帳のようなイベントだと考えられよう。しかし、前年のミッドウェー海戦で空母四隻すべてを撃沈されるといった大敗後、戦局の劣勢は明らかだった。和田利夫は「たてまつられた軍艦を、どこの海に浮かべるつもりだったのだろうか」と問うているが、現在から振り返れば誰もが同じように抱く疑問である。

「今から思うと、「艦たてまつれ」は、詩人たちの共同幻想による一場の祭典でしかなかった」との断言は、まさにその通りで、国家の共同幻想に与する詩の祭典が、いかに

進めた「学徒」たちは、当時の学生運動を、第二次世界大戦下の日本国家の状況に擬えて捉えようとしていた。「わが睫毛昏き祖国をはさみて眠る」は、学生運動の見えない出口を前に疲弊し、高らかな夢が屋気楼のように幻影へと姿を変えるなか、それでも覚めない眠りを描出している。病んでいるのは「われ」なのか、それとも国家なのか。

田島邦彦の書き入れた歌は、寺山修司の代表歌に引き付けられ、寄り添っていくかのようにして傾いて並ぶ。一九五六年初出の寺山修司「マッチ擦る」¹⁾一首は、戦後であつて、一九六〇年を詠んだ歌ではない。しかし、一九六〇年学生運動のイメージの源泉であつた。岸上大作世代は以上見てきたようにして、寺山修司の代表歌を次の時代に再生産し、時代を切り開こうとしていたのだ。

注

(1) 「岸上大作の寺山修司 I — 歌句「マッチ擦る」の所作をめぐって」(『立正大学文学部論叢』一三七号、二〇一四・三)、「岸上大作の寺山修司 II — 「寺山修司論」、その多様な状況への「われ」の設定」(『立正大学国語国文』五十三号、二〇一五・三)、ともに拙著『文学における隣人』— 寺山修司への入口 — (KADOKAWA、二〇一八・三)に所収。

(2) 『國學院短歌』三十一号(一九六〇・五)に「意思表示抄」四月二六日「七首を発表。その後、この一首を冒頭に置いた「意思表示」

四十首が、第三回『短歌研究』（一九六〇）の新人賞「推薦」に選ばれた。

- (3) 『短歌研究』（一九五六・四）に「獺銃音」三十首を発表、その冒頭に置かれた。その後、第一作品集『われに五月を』（作品社、一九五七・二）の「祖国喪失」三十四首の冒頭に置かれ、第二歌集『空には本』（的場書房、一九五八・六）の「祖国喪失」の十二首、IIの十二首の冒頭に置かれる。
- (4) 「岸上大作の『意志表示』論ノート」〈壁〉について」（『山梨英和短期大学紀要』一九八八・二）で、今西幹一は石川啄木「マチ擦れば／＼尺ばかりの明るさの中をよぎれる白き蛾のあり」（『一握の砂』一九一〇・十二）を挙げ、「現代における本歌取りのような、発想の重層性がある」とし、「まちがいなく寺山においては、啄木歌は受容され、寺山的世界の中で呼吸している。この岸上―寺山―啄木の系譜の中に、岸上短歌の特質解明の鍵が潜んでいる」と指摘する。
- (5) 『短歌』十一月号（一九六〇・九）
- (6) 『岸上大作全集』（思潮社、一九七〇・十二）の付録「岸上大作考」への依頼原稿。
- (7) 富士田元彦は「岸上への愛情の逆表現だろう」と捉えている（『岸上大作と清原日出夫―そして同人誌の作家たち』、富士田元彦『短歌論集』国文社、一九七九・十二）
- (8) (923) 『空には本』（岸上大作旧蔵本）、石神井書林目録104号（2019・1）
- (9) 「安静にしていなかった寺山修司はついに、体があまりに辛くなり、立川に母を訪ねた。昼夜働いていた母は、夜の仕事までのひとときを定食屋で夕食をとっていた。そこへ、修司が無塩醤油

の瓶を抱えて憔悴しきった姿で現れた。驚いた母は立川市錦町の川野病院に緊急入院させた。川野病院には記録がなく、手紙などから、入院は昭和三十年の三月初めのことだったと推測される。」（小川太郎『寺山修司 その知られざる青春―歌の源流をさぐって―』三一書房、一九九七・一）

- (10) 小川太郎は中野トク宛ての寺山修司の手紙を調査しているなかで、次のように書いている。「私（小川太郎）が病院に残っていた資料から調べてもらったところによると、寺山修司が東京都新宿区の社会保険中央病院に入院したのは、昭和三十年六月二十日のことだからだ。今回は生活保護法の適用を受けての入院だった。下宿先の石川が福祉事務所の所長で手続きなどを教えてくれたと、寺山の母・はつから筆者は直接聞いたことがある。」（同注9）
- (11) 「私の行先は、退院の二、三日前に外出許可をもらって、学徒援護会の紹介で契約した新宿区諏訪町の六畳一間のアパートである。窓にカーテンもついていない、がらんとした空室で、私は「これからどうしたらいいものか」と途方にくれた」（『消しゴム』―自伝抄、『黄金時代』九藝出版、一九七八・七所収）
- (12) 大和書房、一九七三・十二
- (13) 第3巻 第5号、弘隆社、一九八七・四・二五
- (14) 図録「歌人 岸上大作 60年ある青春の軌跡」（姫路文学館、一九九九・八）
- (15) 『具象』第一号（一九六〇・七・十五、東京都杉並区久我山3ノ174 新開方）
具象グループ 角口芳子・岸上大作・沢口千鶴子・高瀬隆和・田島邦彦・津田正義・林安一・平田浩二・山口礼子
- (16) 同注(15)に掲載

- (17) 嶋岡農「空間への執着」（『短歌研究』一九五八・七）のちに、寺山修司と嶋岡農との「様式論争」と呼ばれる前衛短歌論争の最初の批評。「その傾向（私小説性の否定―筆者注）はおおよそ感じとれるが、多様な状況の設定のなかに選ばれた「われ」なるものが、フィクションの機能のもとにどれだけ真実の自我を生かしているかは疑問に思われる。」（嶋岡農）
- (18) 同注(14)
- (19) 短歌新聞社、一九七〇・一・一
- (20) 短歌研究社、二〇一二・二・二八
- (21) 見落としている場合もあるので、ご教示願えれば嬉しい。
- (22) 姫路文学館学芸員の竹廣裕子氏にご協力いただいたことを深く感謝いたします。
- (23) 『彷彿月刊』特集「寺山修司がいた」の執筆者であり、古書店店主の内堀弘氏に確認した。ご助言を深く感謝いたします。
- (24) 西村尚の歌と同様、国立国会図書館所蔵の歌集を確認したが、歌の出自は不明であった。
- (25) 『まひる野』は戦時下、窪田空穂の長男で早稲田大学教授の窪田章一郎のもとに国文科の学生が集まって指導を受けた会合が母体となってきた短歌結社の短歌誌。
- (26) 小菅麻起子は、「父還せ」の叫びはいわば「戦争の傷痕」そのものであり、同じ表題の「父還へせ」という作品が『短歌研究』（一九五〇・十）に既に発表されていることを指摘している（『初期寺山修司研究―「チェホフ祭」から「空には本」 翰林書房、二〇一三・三）
- (27) 『原爆の下に隠されしもの―遠藤周作から寺山修司まで―』（笠間書院、二〇一七・七）

- (28) スティープン・リジリー（『短歌研究』特集・映画と短歌、二〇一三・三十一）
- (29) 『田中冬二全集』第二巻（筑摩書房、一九八五・四）の詩編索引による。
- (30) 田島邦彦「現代短歌論」 同注(15)に掲載
- (31) 筑摩書房、一九九一・十一

図1、図2、図5 姫路文学館提供

【付記】

本稿は、二〇一九年六月二十二日、前橋文学館で開催された国際寺山修司学会第二十四回夏季大会にて研究発表した内容に基づきます。当日、貴重なご教示をくださった方々に感謝申し上げます。その後、岸上大作旧蔵の寺山修司第一歌集『空には本』は、二〇二〇年十二月五日から三月二十一日まで姫路文学館で開催された企画展「没後六十年記念 歌人岸上大作展」にて一般公開され、企画展示図録に画像と解説が掲載されました。また、「東奥日報」二〇二二年二月二十六日と、「東京新聞」二〇二二年三月二十五日との記事で〈新資料〉として紹介されました。二〇二二年三月二十二日には白根記念渋谷区郷土博物館・文学館にて、本稿の内容に準じた文学講演会を開催しました。

〔本研究は「科研費」基礎研究(20K00301)の助成を受けたもの。〕

〔はなじり りゅういち 立正大学文学部教授〕